

# ショパンの作品におけるヴァリアントの選択 — 《バラード》の場合 —

## Choice of Variants in F. Chopin's Works — In the Case of “Ballads” —

多田 純一 岡部 玲子<sup>1</sup> 武田 幸子<sup>2</sup>  
TADA Junichi OKABE Reiko<sup>1</sup> TAKEDA Sachiko<sup>2</sup>

本論の目的は、フリデリク・フランチシェク・ショパン Fryderyk Franciszek Chopin (1810-1849) の作品におけるヴァリアントの選択について考察することである。ショパンが関わったとされる手稿譜や初版譜やその後続版、弟子の楽譜に見られる書き込み、などの一次資料にみられる音や記号、フレーズの違いは、ショパンの音楽が持つ多様性であるということが研究者間では共通認識となっており、演奏家にも浸透してきている。そのことにより、演奏者は楽譜に複数のヴァリアントが示されている場合、どのヴァージョンを自身の演奏に反映させるかを選択することが可能である。しかしながら、演奏者自身や、聴衆あるいはコンクールの審査員が聴きなれない音や弾きなれない音を取り入れることに、とまどいを感じる場合が多いのではないかと予測される。本論では、フリデリク・ショパン国際ピアノ・コンクールの第1次予選および第2次予選の選択曲に指定されている《バラード》全4曲について、具体的にどのような箇所ではヴァリアントの選択が行われるのかについて考察した。

キーワード：ショパン、フリデリク・ショパン国際ピアノ・コンクール、エディション、ヴァリアント、バラード

Key Words：Chopin, Fryderyk Chopin International Piano Competition, Edition, Variant, Ballades

### 1. 本論の目的と先行研究

#### 1-1 本論の目的

本研究は、科学研究費「ショパン作品の演奏におけるヴァリアントの選択と即興的表現の研究」(20K00244)の一環である。この科学研究費助成事業の概要は、フリデリク・フランチシェク・ショパン Fryderyk Franciszek Chopin (1810-1849) の作品のみを課題曲とする第18回フリデリク・ショパン国際ピアノ・コンクール(以下、ショパン・コンクールと呼ぶ)を主軸に置き、2018年9月に行われた第1回ショパン国際ピリオド楽器コンクール(以下、ショパン・ピリオド楽器コンクールと呼ぶ)後に行われるショパン・コンクールにおけるヴァリアントの選択および即興的演奏の有無を分析し、演奏表現とエディション選択の関連性を考察すること、そして、ピリオド楽器奏者の演奏とモダン楽器奏者の演奏の相違点を考察することである。

第1回ショパン・ピリオド楽器コンクールでは、それまでに行われたショパン・コンクールでは見られない、即興演奏や作品と作品の間の即興的な繋ぎなどが行われた。また、同じ音型が繰り返される場合においても、ヴァリアントとして楽譜には示されていない、演奏者自身の解釈による装飾音の追加も行われた。ここで着目されるのは、「ショパン的」な演奏の在り方である。ピリオド楽器奏者による即興的演奏表現は、演奏解釈として徐々

<sup>1</sup> つくば国際短期大学 Tsukuba International Junior College

<sup>2</sup> JSPS 科研費 20K00244 研究協力者 JSPS Grants-in-Aid for scientific research 20K00244 research cooperators

に受け容れられつつある。そのことにより、近年では「ショパン的」な演奏解釈には変化が生じており、現代のピアノ、すなわちモダン楽器で演奏される第18回ショパン・コンクールにおける演奏表現にながしかの影響を与えると予測されると筆者らは考えている。

しかしながら、本年2020年は新型コロナウイルス（COVID-19）の影響により、2020年10月に開催予定であった第18回ショパン・コンクールは2021年10月に延期された。そのことにより、科学研究費の初年度に実施する予定であった、第18回ショパン・コンクールにおける参加者の演奏表現について、ヴァリエーションの選択および即興的演奏の有無の分析および演奏表現とエディション選択の関連性を考察することが不可能になった。この理由から、本論ではヴァリエーションの選択のみに焦点を絞る、その対象を第1次予選および第2次予選の選択作品として指定されている《バラード》全4曲とする。

## 1-2 先行研究

ショパン・ピリオド楽器コンクールについての先行研究は、2件挙げられる。1件目は、このコンクールの芸術的、社会的意義について考察した加藤一郎の論文である。加藤は、多声的表現、ペダリング、小節1拍目の表現方法、倚音<sup>注1)</sup>の表現方法、の観点から、具体的にショパン・ピリオド楽器コンクールの演奏例を主にショパンの自筆譜と照らし合わせながら、その演奏表現と効果を述べつつ、「倚音の問題については、ピリオド楽器の柔らかな音が楽器全体に溶け込むような性質を持っていることから、それが倚音の持つ独特な音色的効果を醸し出しているものと考えられる。これらのことは現代ピアノによるショパン演奏にも役立つであろう（中略）現代ピアノによる演奏にはそれならではの表現様式も必要となろう。ピリオド楽器による演奏を現代ピアノで単に模倣するのではなく、そこからショパンの精神を汲み取り、現代ピアノによる演奏に活かして行くことが私達に求められているのではないだろうか」<sup>1)</sup>と説明している。

2件目は、2019年3月に一橋大学にて行われたシンポジウムである<sup>注2)</sup>。音楽学者である小岩信治が司会、パネリストはフォルテピアノ奏者の小倉貴久子、鍵盤楽器製作を行っている太田垣至、音楽学者の松尾梨沙、ゲストはショパン・ピリオド楽器コンクールで第2位に入賞した川口成彦である。それぞれの立場から報告および意見交換が行われ、フォルテピアノ奏者の2名による演奏も含まれたが、本論に関わるのは、川口による「今までショパンをたくさん弾いてきた人が、楽器が当時の楽器になることで皆さん演奏を勉強しなおしたりしたようで、そうすると解釈も変わると思うし、いろんな立ち位置の二〇代三〇代の人たちがいました」<sup>2)</sup>というひとりの参加者としての分析と、松尾による「このコンクールが来年以降のモダンのコンクールにも影響を及ぼしてほしいと思っています。最近のモダン・ピアノのショパンコンクールでは、すこぶる技術力は高いが視野が狭い演奏、いかに正確に速くダイナミックに演奏できるかという特定の価値観に走る演奏が大変多く、それこそ一点からしか見ていない行き詰まりを感じる人が多いです。一方で今回のようにピリオド楽器で演奏するには、経験の蓄積と学術的な探求心が大変重要になります。時代考証なしには演奏できませんので、当時の楽器や演奏習慣、環境など、こうした学術研究の一端を演奏家が知ろう、勉強しようとすることに繋がります。」<sup>3)</sup>という音楽学者としての見解である。ピリオド楽器とモダン楽器ではショパンの作品の演奏に対するアプローチの方法が違うことを示している。しかしながら、いずれも具体的に即興演奏やヴァリエーションの選択がどのように影響されるであろうかという予測や、エディションの問題にまでは踏み込んでいない。このシンポジウムは後日、全日本ピアノ指導者協会のウェブサイトにて、その補足記事が掲載された<sup>4) 5)</sup>。この記事の中で、小岩は次のように述べている。

「楽譜に忠実」というのは、現代の音楽家なら誰もが意識する紋切型の表現です。しかし、実はこの考え方が根付いたのは19世紀後半以降。これに対し、ショパンが活躍した19世紀前半の演奏家はみな作曲家であり、即興の名手でありました。とりわけショパンは自身の作品を弾く度、違った演奏をしていたと伝えられています。「楽譜に忠実」であるモダンピアノ奏者に対して、このような、楽譜に書き残されなかった情報を含め

た「演奏習慣そのものを重視する」のがピリオド楽器奏者です。(中略) 川口氏が高く評価された理由は、彼が楽譜に書かれていることの背景を熟知し、当時の音楽的な語り口を身につけ、ショパンも当然その文脈の中にいたであろうと思わせる演奏をしたからです。彼のような演奏は「楽譜に忠実」である以上に、楽譜を成り立たせている語法、装飾音、トリルの習慣を身につけることによって生まれます。「楽譜に忠実」な演奏をよく知る人は、装飾音やモデレーターペダルを使い、繰り返されるパッセージで二度同じことをしない自由な川口氏の演奏にはきっと驚くでしょう。しかし彼の演奏のような即興的な文化の中に確かにショパンも生きていたのです。<sup>6)</sup>

小岩が指摘するように、モダン楽器の演奏者は「楽譜に忠実」であろうとする。しかしながら、ショパンの作品の場合、その楽譜そのものにヴァリエーションが示されており、演奏者はその選択をする必要がある。また、ヴァリエーションを楽譜部分、あるいは楽譜に隣接した下部等に示すのか、あるいは校訂報告に留めるのかについては、同じ作品でも校訂者によって異なる。さらに即興演奏まで含むのかは、その次の段階となるだろう。

ショパンの作品における、さまざまな校訂者により複数の出版社から出版されている楽譜に見られる違いをどのように読むのかというエディションの問題と、手稿譜や初版などショパンが関わったと思われる資料に基づいて校訂される原典版においても見られる違い、そしてひとつの楽譜の中にも複数のヴァージョンが示されるヴァリエーションの問題は、「ショパン問題」として長期間にわたり検討されてきたが、すでに解決している。主にジャン＝ジャック・エーゲルディンゲル *Jean-Jacques Eigeldinger* とジェフリー・コールバーグ *Jeffrey Kallberg* による功績が大きい。ショパンの教育や弟子の楽譜への書き込みなどについて述べられたエーゲルディンゲルの著書『弟子から見たショパン』により、ショパンは自身の作品を2度同じように弾くことはなかったことが広く知られるようになった<sup>7)</sup>。この本は幾度も改訂されているが、初版が出版されたのは1970年である。1982年には、ショパンの書き込みが見られる、弟子ジェーン・スターリング *Jane Stirling* の楽譜をファクリミリとして出版した<sup>8)</sup>。スターリングの楽譜は、現在、ショパンの各原典版において主要な資料として使用されている。今日では、自筆譜や初版譜、弟子の楽譜などを小節単位で比較することができるウェブサイト *The Online Chopin Variorum (OCVE)*<sup>9)</sup> が存在するが、その中にもスターリングの楽譜は含まれている。エーゲルディンゲルの取り組みは、自筆譜だけでなく、弟子の楽譜への書き込みも画像資料として公開した点が特筆に値し、その発想が *OCVE* やフランス、ドイツ、イギリスの各国から出版された初版を網羅した *Chopin's First Editions Online (CFEO)*<sup>10)</sup> などの取り組みへとつながっていると見える。

一方で、コールバーグの博士論文では、「第1段階：ピアノにて」、「第2段階：スケッチ」、「第3段階：公開のための自筆譜、公開を放棄した自筆譜、出版のために用意された手稿譜、贈呈用手稿譜」、「第4段階：筆写譜」というショパンの創作過程が明らかにされた<sup>11)</sup>。現在のポーランド国立フリデリク・ショパン研究所 *Narodowy Instytut Fryderyka Chopina* の前身にあたるフリデリク・ショパン協会 *Towarzystwo im. Fryderyka Chopina* の学会誌で1990年に発表された論文では、「作品のたった一つの見方を印刷に固定させることによって、我々はショパンと彼の音楽と彼の時代に、ひどい仕打ちをする。(中略) 19世紀において、ショパンにとっても、聴く人にとっても、音楽は固定的ではなく流動的な概念だった。これは、彼が関係したほぼすべての資料において、なぜ彼が作曲を、改訂を、削除をし続けたかを説明する」<sup>12)</sup> と述べている。岡部玲子は2001年に発表した博士論文において、コールバーグの文章を引用しつつ、パラダイムの概念を取り入れ、すべてのヴァリエーションが同列に並ぶ《バラード》全4曲のパラダイム楽譜を作成した<sup>13)</sup>。

上記の通り、20世紀の間にエディションの問題とヴァリエーションの問題は解決し、研究者間では共通認識となっている。そして、21世紀に入ると資料研究や楽譜の校訂の方法論が再検討され、新たな原典版が使用されはじめている。ポーランドが国家事業として取り組み2010年に全集として完結した、ヤン・エキエル *Jan Ekier* 校訂ナショナル・エディショ

ンの新版をはじめ、ノルベルト・ミュレマン Norbert Müllemann 校訂によるヘンレ原典版の新版、ジョン・リンク John Rink 他校訂によるペータース社のショパン全集 新批判校訂版が順次出版されており、さらにベーレンライター社も新たな原典版を出版しはじめている。本論では、新たな原典版に示されたヴァリエーションについて、どのような箇所を選択の可能性が生じるのかを考察すると共に、その対象作品を《バラード》全4曲に絞り、第18回ショパン・コンクールにおける演奏表現のチェックポイントの一部分を設定する。

## 2. 研究方法

本論では、第18回ショパン・コンクールにおける演奏表現のチェックポイントを、《バラード》全4曲において設定することを目的としている。その方法としては、まず、ショパンが関わった楽譜における差異が、原典版にどのように反映されているかを調査する。次に、それらの違いの中から、ピアニストたちの演奏を聴いた際に、その違いが明らかに楽譜の違いによると判断できる箇所を検討し、それらをチェックポイントとして設定する。

その検討にあたり、ショパン・コンクールに参加する演奏者の使用頻度が高い<sup>14)</sup> 上述の3つの原典版、すなわち、ナショナル・エディション新版<sup>注3)</sup> (1997)、ペータース新批判校訂版<sup>注4)</sup> (2006)、ヘンレ原典版新版<sup>注5)</sup> (2008)、それにパデレフスキ版<sup>注6)</sup> (1950)を加えた4つの楽譜について、どのような編集方針で校訂されたのかを確認する。ショパンが関わった複数の資料、すなわち、自筆譜、筆写譜、3国(フランス、ドイツ、イギリス)からほぼ同時に出版された初版、弟子の楽譜への書き込み等の資料の関係は、曲によって異なるため、編集方針も曲ごとに確認が必要となる。なお、ベーレンライター社からは《バラード》はまだ出版されていない。

## 3. バラード第1番 ト短調 作品23

### 3-1 資料と各版の編集方針

バラード第1番に関して、ショパンが関わった資料は以下の6点が挙げられる。


1. 自筆譜 A : 1834-35年頃, F1の製版用自筆譜, 16ページ [個人所蔵, 写真複写はNIFC所蔵, F.1468].
2. フランス初版第1刷 F1 : 1836年7月. パリ, モーリス・シュレザンジェ社 M. Schlesinger, プレート番号 M.S. 1928.
3. フランス初版の後続版 F2 : 1836年8月登録. パリ, シュレザンジェ社, プレート番号 M.S. 1928.
4. ドイツ初版 G : 1836年6月, ライプツィヒ, ブライトコプフ・ウント・ヘルテル社 Breitkopf & Härtel, プレート番号 5706.
5. イギリス初版 E : 1836年8月. ロンドン, ウェッセル社 Wessel, プレートナンバー 1644.
6. 弟子デュボワ Dubois の楽譜集 D : F2 を使用 [パリ, 国立図書館所蔵, Rés. F.980 (II,10)].

以上の資料に関して、上述の4種のエディションでは、その編集方針を次のように決定している。

- ナショナル・エディション : F2に基づく, Aを参照する。
- ヘンレ原典版 : F2を主たる資料とする。Aを2次資料とする。
- ペータース新批判校訂版 : F2を主たる資料とする。
- パデレフスキ版 : 自筆譜と初版に基づく。

### 3-2 バラード第1番のチェックポイント

上述のような編集方針の違いにより、楽譜上にヴァリエーションが現われている。その中から、演奏を聴いて、その違いが解釈の違いではなく明らかに楽譜の違いであることが分かる箇所を検討した。その結果、以下の7箇所をチェックポイントとして設定した。

1. 第 26-27 小節右手 d2 間：タイの有無
2. 第 45 小節右手最初の音：f<sub>4</sub>の有無
3. 第 63 小節右手最後の音：c あるいは d
4. 第 88 小節右手：1・2 拍目の d 音間のスラーの有無，1 拍目の音のスタッカートの有無
5. 第 103-105 小節左手：6 拍目の和音の有無
6. 第 119 小節右手 2 拍目： の上に#の有無

以上のチェックポイントについて、各資料に現われているヴァリエントの一覧を付表 1 に示した。

#### 4. バラード第 2 番 へ長調 作品 38

##### 4-1 資料と各版の編集方針

バラード第 2 番に関して、ショパンが関わった資料は以下の 9 点が挙げられる。

1. 自筆譜 A：1838-39 年. F1 のための製版用自筆譜，9 ページ [パリ，国立図書館所蔵，Mus. 107].
2. 筆写譜 C：自筆の修正を伴ったグートマンの筆写譜，1839 年頃. ブライトコプフ&ヘルテル社のための製版用筆写譜，10 ページ [ストックホルムの音楽振興財団所蔵].
3. フランス初版 (F1) の校正刷り FP (タイトルページなし)：A から準備された. 修正されていない. 1840 年 10 月 [パリ，国立図書館所蔵，Ac.p.2686].
4. フランス初版第 1 刷 F1：1840. パリ，トルプナ社 Troupenas，プレート番号 T.925.
5. F1 の後続版 F2：1841 年頃，パリ，トルプナ社，プレート番号 T.925.
6. ドイツ初版 G：1840 年. ライプツィヒ，ブライトコプフ&ヘルテル社，プレート番号 6330. C から準備された.
7. イギリス初版 E：1840 年 10 月 1 日. ロンドン，ウェッセル社，プレート番号 3182.
8. 姉イエンジェイェーヴィチ Jędrzejewicz の楽譜集 J：F1 を使用 [NIFC 所蔵，M/176].
9. 弟子スターリングの楽譜集 S：F2 を使用 [パリ，国立図書館所蔵，Vma. 241 (V, 38)].

以上の資料に関して、上述の 4 種のエディションでは、その編集方針を次のように決定している。

ナショナル・エディション：A に基づく。C と F2，および，J と S を参照する。

ヘンレ原典版：F2 を主たる資料とする。A と C を 2 次資料とする。

ペーターズ新批判校訂版：F1 を主たる資料とする。

パデレフスキ版：自筆譜と初版に基づく。

##### 4-2 バラード第 2 番のチェックポイント

上述のような編集方針の違いにより、楽譜上にヴァリエントが現われている。その中から、演奏を聴いて、その違いが解釈の違いではなく明らかに楽譜の違いであることが分かる箇所を検討した。その結果、以下の 6 箇所をチェックポイントとして設定した。

1. 第 52 小節右手：1-2 拍目の音
2. 第 101 小節前半右手：上声部のリズム
3. 第 105 小節右手内声：f1 音に変化するのが 4 拍目か 6 拍目か
4. 第 147 小節右手：最初の音
5. 第 195 小節後半両手：和音の音
6. 第 201-203 小節両手：和音の音が何パターンもあるが、特に、第 202-203 小節左手がオクターヴ高いか低い

以上のチェックポイントについて、各資料に現われているヴァリエントの一覧を付表 2 に示した。

## 5. バラード第3番 変イ短調 作品 47

### 5-1 資料と各版の編集方針

バラード第3番に関して、ショパンが関わった資料は以下の11点が挙げられる。

1. 自筆譜 A (紛失) : 1841年10月. ドイツ初版の版下となった [写真複写はNIFC所蔵, F.1433].
2. 筆写譜 1 C1 : フォンタナ Fontana による筆写譜, 紛失. フランス初版の版下となった.
3. 筆写譜 2 C2 : サン=サーンス Saint-Saëns による筆写譜 [パリ, フランス国立図書館所蔵, Ms.108]. ほぼ確実にフォンタナによる筆写譜を基としている. ショパンの死後に筆写された可能性もあるが, これにより紛失した筆写譜 C1 を復元できるため, 資料に含める.
4. フランス初版第1刷 F1 : 1841年11月. パリ, シュレザンジェ社, プレート番号 M.S. 3486.
5. フランス初版後続版 F2 : 1841年12月. パリ, シュレザンジェ社, プレート番号 M.S. 3486.
6. ドイツ初版 G : 1842年1月. ライツツィヒ, ブライトコプフ・ウント・ヘルテル社. プレート番号 6652.
7. イギリス初版 E : 1842年1月20日登録. ロンドン, ウェッセル社, プレート番号 5299.
8. 弟子デュボワの楽譜集 D : フランス初版. パリ, フランス国立図書館所蔵 [Rés. F.980 (II, 12)].
9. 弟子スターリングの楽譜集 S : フランス初版. パリ, フランス国立図書館所蔵 [Vma. 241 (V, 47)].
10. 姉イエンジェイエーヴィチの楽譜集 J : フランス初版 [ワルシャワ, NIFC 所蔵, M/176].
11. 弟子シェルバトフ Scherbatoff の楽譜集 Sch : フランス初版 [ケンブリッジ, ハーバード大学図書館ホートン文庫 Houghton Library 所蔵 f.Mus.C.4555 B.846 c].

以上の資料に関して, 上述の4種のエディションでは, その編集方針を以下のように決定している.

- ナショナル・エディション : F2に基づく. Aを参照する.
- ヘンレ原典版 : F2を主たる資料とする. Aを2次資料とする.
- ペータース新批判校訂版 : 自筆譜Aを主たる資料とする.
- パデレフスキ版 : 自筆譜と初版に基づく.

### 5-2 バラード第3番のチェックポイント

上述のような編集方針の違いにより, 楽譜上にヴァリエーションが現われている. その中から, 演奏を聴いて, その違いが解釈の違いではなく明らかに楽譜の違いであることが分かる箇所を検討した. その結果, 以下の10箇所をチェックポイントとして設定した.

1. 第6-7小節左手 es 音間のタイの有無
2. 第47-49小節左手 : オクターヴ下の音の付加の有無
3. 第99小節右手リズム
4. 第116, 118, 120, 122小節 : 右手前打音の開始位置の指示
5. 第140小節右手 : 3拍目と4拍目のオクターヴ as2-as3 間のタイの有無
6. 第162小節右手 : 3拍目と4拍目の和音間のタイの有無
7. 第176小節 : 左手リズム
8. 第200小節前半 : 右手リズム
9. 第216小節後半 : 両手リズム
10. 第231, 233小節 : 右手前打音の開始位置の指示

以上のチェックポイントについて、各資料に現われているヴァリエントの一覧を付表 3 に示した。

## 6. バラード第 4 番 へ短調 作品 52

### 6-1 資料と各版の編集方針

バラード第 4 番に関して、ショパンが関わった資料は以下の 8 点が挙げられる。

1. 自筆譜 A1：不完全な自筆譜（第 1 小節から第 79 小節）、1842 年頃。4 分の 6 拍子であり、他の楽譜上との違いがある。4 ページ [個人所蔵、写真複写は NIFC 所蔵、F.1434]。
2. 自筆譜 [A2]：推測に基づく自筆譜。F1 の製版用自筆譜。
3. 自筆譜 [A3]：推測に基づく自筆譜。E の製版用自筆譜。
4. 自筆譜 A4：不完全な自筆譜（第 1 小節から第 136 小節）、1842 年頃。G の製版用自筆譜の一部。4 ページ [GB-Ob : Ms. M. D. [eneke] M. [endelssohn] b. 2, fols 52-53]。
5. フランス初版第 1 刷 F1：1843 年 12 月。パリ、モーリス・シュレザンジェ社、プレート番号 M.S 3957。
6. フランス初版後続版 F2：F1 の後の版、1843 年 12 月。パリ、シュレザンジェ社、プレート番号 M.S 3957。
7. ドイツ初版 G：1843 年 11 月。ライプツィヒ、ブライトコプフ・ウント・ヘルテル社、プレート番号 7001。
8. イギリス初版 E：1844 年 3 月 1 日登録。ロンドン、ウェッセル社、プレートナンバー 5305。

以上の資料に関して、上述の 4 種のエディションでは、その編集方針を以下のように決定している。

ナショナル・エディション：A4 に基づく。第 137 小節以降はドイツ初版 G に基づき、フランス初版 F とイギリス初版 E を参照する。

ヘンレ原典版：A4（第 136 小節まで）とドイツ初版 G（第 137 小節以降）を主たる資料とする。

ペータース新批判校訂版：ドイツ初版 G を主たる資料とする。

パデレフスキ版：自筆譜と初版に基づく。

### 6-2 バラード第 4 番のチェックポイント

上述のような編集方針の違いにより、楽譜上にヴァリエントが現われている。その中から、演奏を聴いて、その違いが解釈の違いではなく明らかに楽譜の違いであることが分かる箇所を検討した。その結果、以下の 7 箇所をチェックポイントとして設定した。

1. 第 43-44 小節右手和音間：タイの有無
2. 第 87-88 小節右手和音間：タイの有無
3. 第 92 小節右手 6 拍目：d2 か b1 か
4. 第 104 小節左手：右手とユニゾンか 2 拍目 5 拍目を延ばしているか
5. 第 108-109 小節右手和音間：タイの有無
6. 第 123 小節右上声：3 拍目と 4 拍目の間：タイの有無
7. 第 150 小節右手：3 拍目と 4 拍目の間のタイの有無

以上のチェックポイントについて、各資料に現われているヴァリエントの一覧を付表 4 に示した。

## 7. まとめ

本論では、《バラード》全 4 曲を対象作品として、どのような箇所でヴァリエントの選択

の可能性が生じるのかを考察し、第18回ショパン・コンクールにおける演奏表現のチェックポイントの一部分を設定した。チェックポイントは、演奏を聴いて、そのヴァリエーションが演奏表現の違いではなく、明らかに楽譜の違いによることがわかる箇所とした。その結果、《バラード》の第1番は7箇所、第2番は6箇所、第3番は10箇所、第4番は7箇所のチェックポイントを設定することができた。

今後は、今回設定したチェックポイントに基づき、実際にコンクールの演奏を聴いてチェックする際に使用するチェックシートを作成すること、さらに、第1次予選の課題曲となっている他の作品でも、同様の方法でチェックポイントを設定し、チェックシートを作成することが課題となる。

本研究は JSPS 科研費 20K00244 の助成を受けたものです。

## 注釈

注1) 「倚音 (いおん)」とは、『デジタル大辞泉』では「前打音」であるとされ、「前打音 (ぜんだおん)」とは「装飾音の一。ある音符に付随し、それに先だつて短く奏される音。倚音。」<sup>15)</sup>と説明されている。

注2) 平成31年3月13日(水)14:00~16:30に、一橋大学インテリジェントホールにおいてシンポジウムが開催され<sup>16)</sup>、本論執筆者の3名共に聴講参加した。その際に配布されたレジュメは次の通り。小岩信治、小倉貴久子、太田垣至、松尾梨沙、川口成彦：「一橋大学国内交流セミナー シンポジウム 『歴史的ピアノと音楽文化 第一回ショパン国際ピリオド楽器コンクールをふりかえる』」2019年3月13日、一橋大学インテリジェントホール(2019)

注3) ショパン生誕150年を記念してエキエル校訂によりポーランドの国家事業として1959年からナショナル・エディション(原題は *Wydanie Narodowe Dzieł Fryderyka Chopina*, 出版社はポーランド音楽出版 *Polskie Wydawnictwo Muzyczne*)の刊行が着手された。第1巻として1967年に『バラード集』が出版されたが、1997年より新たな研究成果を反映させ、リニューアル出版され、2020年に全集として完結した。本論ではこのリニューアルされた版をナショナル・エディション新版と呼ぶ。

注4) *The Complete Chopin, A New Critical Edition* としてペータース社 Edition Peters から順次刊行されている。2003年にジャン＝ジャック・エーゲルディンゲル校訂の『プレリュード集』が最初に出版された。クリストフ・グラボフスキ *Christophe Grabowski*, ジム・サムソン *Jim Samson* 等、作品によって校訂者が異なる。本論ではペータース新批判校訂版と呼ぶ。

注5) ベートーヴェンの作品をはじめとする原典版の出版でよく知られるヘンレ社 *G. Henle Verlag* からは、ショパンの作品は1956年から1990年にかけて、エヴァルト・ツィメルマン *Ewald Zimmermann* 校訂により出版された。その後、2007年出版の『プレリュード集』を皮切りにミュレマン校訂による新たな版が順次出版されており、本論ではミュレマン校訂の版をヘンレ原典版新版と呼ぶ。

注6) イグナツィ・ヤン・パデレフスキ *Ignacy Jan Paderewski* 校訂(1950)。パデレフスキ版を加える理由は、世界的に多く使用されている版であること、ショパン・コンクールでの使用頻度も高いこと、および、全集としてほぼすべての曲が出版されていることである。原典版のうち完結しているのはナショナル・エディションのみであり、ヘンレ新原典版とペータース新批判校訂版は出版されている曲集の方が少ない。

## 引用・参考文献

- 1) 加藤一郎：『第1回ショパン国際ピリオド楽器コンクール』の芸術的・社会的意義に関する研究：演奏解釈と楽器及び楽譜の関連を通して、国立音楽大学紀要編集委員会『研究紀要』, 53(1), pp.101-102(2019)



- 2) 小岩信治：「シンポジウム 一橋大学国内交流セミナー シンポジウム 歴史的ピアノと音楽文化：第一回ショパン国際ピリオド楽器コンクールをふりかえる」、『言語社会：Gensha』, 14, p.307 (2020)
- 3) 2) と同稿, pp.311-312
- 4) 全日本ピアノ指導者協会（ピティナ）：『会員・会友レポート』, 中野春花執筆「シンポジウム歴史的ピアノと音楽文化第 1 回ショパン国際ピリオド楽器コンクールを振り返る前編」(2019), [http://www.piano.or.jp/report/04ess/itntl/2019/05/21\\_25410.html](http://www.piano.or.jp/report/04ess/itntl/2019/05/21_25410.html) (2020.11.1)
- 5) 全日本ピアノ指導者協会（ピティナ）：『会員・会友レポート』, 中野春花執筆「シンポジウム歴史的ピアノと音楽文化第 1 回ショパン国際ピリオド楽器コンクールを振り返る後編」(2019), [http://www.piano.or.jp/report/04ess/itntl/2019/05/22\\_25411.html](http://www.piano.or.jp/report/04ess/itntl/2019/05/22_25411.html) (2020.11.1)
- 6) 5) と同稿, ウェブ掲載のためページ番号なし
- 7) ジャン=ジャック・エーゲルディンゲル著 ; 米谷治郎, 中島弘二訳：『弟子から見たショパン：そのピアノ教育法と演奏美学 増補・改訂版』, 音楽之友社, pp.77-78 (2005)  
Eigeldinger, Jean-Jacques : Chopin vu par ses élèves, Fayard, pp.81-82 (2006)
- 8) Eigeldinger, Jean-Jacques : Œuvres Pour Piano, fac-similé de l'exemplaire de Jane W. Stirling avec annotations et corrections de l'auteur (ancienne collection Edouard Ganche), Bibliothèque Nationale (1982)
- 9) King's Digital Lab : The Online Chopin Variorum (OCVE), <http://www.chopinonline.ac.uk/ocve/> (2020.11.1)
- 10) King's Digital Lab : Chopin's First Editions Online (CFEO), <http://www.chopinonline.ac.uk/cfeo/> (2020.11.1)
- 11) Kallberg, Jeffrey : The Chopin Sources : Variants and Versions in Later Manuscripts and Printed Editions. (Ph.D. dissertation) , The University of Chicago, pp.142-188 (1982)
- 12) Kallberg, Jeffrey (訳：岡部玲子) : Are Variants a Problem? 'Composer's Intentions in Editing Chopin', *Chopin Studies* 3, Towarzystwo im. Fryderyka Chopina, p. 267 (1990)
- 13) 岡部玲子：『パラダイム手法によるショパン《バラード》全4曲のエディション研究』[博士論文], お茶の水女子大学大学院 (2001)
- 14) 岡部玲子, 加藤一郎, 武田幸子：「フリデリク・ショパン国際ピアノ・コンクールにおけるエディションの選択とその変化」, 常磐大学人間科学部紀要『人間科学』, 35 (2), pp.15-28 (2018)
- 15) 「倚音」「前打音」, デジタル大辞泉, Japan Knowledge, <https://japanknowledge.com/lib/display/?lid=2001010597900> (2020.11.24)
- 16) 一橋大学：「過去の一橋大学国内交流セミナー一覧 (2018 年度まで)」, [https://www.hit-u.ac.jp/kenkyu/hit\\_seminar/list\\_d/list\\_d.html](https://www.hit-u.ac.jp/kenkyu/hit_seminar/list_d/list_d.html) (2020.11.24)



付表1 ショパン作曲《バラード》第1番 7 短調 作品23におけるヴァリアント

資料名, 校訂者等	略号	出版年	1. 第26-27小節 右手d2間のタイ	2. 第45小節 右手最初の音:f <sup>h</sup> ※1	3. 第63小節 右手最後の音:c	4. 第88小節 右手・1拍目と2拍目の音 の間のスラーの有無, 1拍 目のb音へのスタッカート の有無	5. 第103-105小節 左手6拍目の和音	6. 第119小節 右手2拍目: の上に#の有無	7. 第259小節 後半両手:オクター ヴの斜線の有無
資料									
1 自筆譜	A		あり	なし	c音	スラー不明瞭, スタッカートあり	なし	なし	あり
2 フランス初版1	F1	1836	なし	なし	c音	スラーあり, スタッカートなし	あり	なし	なし
3 フランス初版2	F2	1836	なし	なし	c音	スラーあり, スタッカートなし	あり	なし	なし
4 ドイツ初版	G	1836	なし	なし, #あり	d音	スラーあり, スタッカートなし	あり	なし	なし
5 イギリス初版	E	1836	なし	なし	c音	スラーあり, スタッカー トなし	あり	なし	なし
6 弟子デュボワの楽譜 ※1	D	1836	なし	なし	c音	スラーあり, スタッカートなし	あり	なし	なし
各版									
1 パデレフスキ版(イグナツィ・ヤン・パデレフスキ Ignacy Jan Paderewski 校訂)	IP	1950	あり	あり	d音	スラーなし, スタッカートなし	第105小節のみあり	あり	あり
2 ナショナル・エディション(ヤン・エキエル Jan Ekier 校訂)	JE	1997	あり	あり	c音	スラーなし, スタッカートあり	あり	なし, <sup>h</sup> あり	あり
3 ベーターズ新批判校訂版(ジム・サムソン Jim Samson 校訂)	JS	2006	( )付きであり	[ ]付きであり	c音	スラーあり, スタッカートなし	ありとなしのヴァージ ョンをメインの楽譜に 併記	なし, [ ]付きで <sup>h</sup> あり	なし, ありのヴァー ジョンをページ下部 に付記
4 ベンレ原典版新版(ノルベルト・ミューレン Norbert Müllemann 校訂)	NMI	2008	あり, ページ下部 に★印で説明付記	( )付きであり	c音, ページ下部に ★印で説明付記	スラーなし, スタッカートなし, ページ 下部に★印で説明付記	第105小節のみあり, ページ下部に★印で説 明付記	なし, ページ下部に ★印で説明付記	なし, ページ下部に ★印で説明付記

※1 ウェブサイト OCVE では、この作品についてデュボワの楽譜が資料に含まれていない。一方で、ショパンの弟子のひとりであるソフィア・ザレスカ＝ローゼンガルトの楽譜 (G を使用) が含まれており、そこではおそらくショパンによると思われる <sup>h</sup> が鉛筆で書き込まれている。デュボワの楽譜はフランス国立図書館のウェブサイトで Gallica にて確認することができる。この作品のデュボワの楽譜が見られる Gallica のアドレスは以下の通り。

<https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b52500440h/f1.item.r=F%20980%20chopin%20op>

また、デュボワが使用した楽譜については、ペーターズ新批判校訂版およびベンレ原典版新版において F2 とされているため、出版年を 1836 年とした。

付表2 ショパン作曲《バラード》第2番 へ長調 作品38におけるヴァリエント

資料名, 校訂者名等			略号	出版年	1. 第52小節	2. 第101小節
					右手:1-2 拍目の音	前半右上声部のリズム
資料	1	自筆譜	A		a-es 重音, c-a-fis 音の順	b 音 as 音ともに4分音符
	2	筆写譜	C		c-fis 重音, e(♭なし) -c-fis の順	b 音4分音符, as 音8分音符
	3	フランス初版校正刷り	FP		a-es 重音, c-a-fis 音の順	b 音 as 音ともに4分音符
	4	フランス初版1	F1	1840	a-es 重音, c-a-fis 音の順	b 音 as 音ともに4分音符
	5	フランス初版2	F2	1841	a-es 重音, c-a-fis 音の順	b 音 as 音ともに4分音符
	6	ドイツ初版	G	1840	c-fis 重音, e(♭なし) -c-fis の順	b 音4分音符, as 音8分音符
	7	イギリス初版	E	1840	a-es 重音, c-a-fis 音の順	b 音 as 音ともに4分音符
	8	姉イエンジェイェーヴィチの楽譜	J	1840 ※1	a-es 重音, c-a-fis 音の順	b 音 as 音ともに4分音符
	9	弟子スターリングの楽譜	S	1841 ※2	a-es 重音, c-a-fis 音の順	b 音 as 音ともに4分音符
各版	1	パデレフスキ版(イグナツィ・ヤン・パデレフスキ Ignacy Jan Paderewski 校訂)	IP	1950	c-fis 重音, es-c-fis の順	b 音4分音符, as 音8分音符
	2	ナショナル・エディション(ヤン・エキエル Jan Ekier 校訂)	JE	1997	c-fis 重音, es-c-fis の順	b 音4分音符, as 音8分音符
	3	ペータース新批判校訂版(ジム・サムソン Jim Samson 校訂)	JS	2006	a-es 重音, c-a-fis 音の順, c-fis 重音, es-c-fis の順のヴァージョンをメインの楽譜に併記	b 音 as 音ともに4分音符, b 音4分音符, as 音8分音符のヴァージョンをメインの楽譜に併記
	4	ヘンレ原典版新版(ノルベルト・ミュレマン Norbert Müllemann 校訂)	NM	2008	a-es 重音, c-a-fis 音の順, c-fis 重音, es-c-fis の順のヴァージョンをページ下部に★印で付記	b 音 as 音ともに4分音符, b 音4分音符

※1 ペータース社新批判原典版, OCVE ともに F1 とされているため, 出版年を 1840 年とした。ヘンレ原典版新版では資料に含まれていない。

※2 ペータース新批判校訂版では F1, ヘンレ原典版新版および OCVE では F2 とされており, 記載の方法が異なっている。ヘンレ原典版新版が意味する F2 は修正される前の版を意味しており, 校正刷りを F1 としている。ペータース新批判校訂版および ODVE では修正された後の版を F2 としている。資料の分類方法そのものに違いが見られるため Annotated Catalogue of Chopin's First Editions (ACO) を確認したところ, スターリングの楽譜は「38-1a -TR」

3. 第 105 小節	4. 第 147 小節	5. 第 195 小節	6. 第 201-203 小節
右手内声:flに変化する のが 4 拍目か 6 拍目か	右手最初の音	後半の音	何パターンもあるが、特に、第 202-203 小節左手がオクターヴ高いか低い
6 拍目	b(♭なし)-e 重音	4 拍目と音 as-b-d, 5 拍目と音 a(♭なし)-h(♭なし)-d, 6 拍目と音 as-b-d	右手和音は d-e-gis-h と c-e-a, 左手は高い方の E-e と A-e
6 拍目	h-e 重音	4 拍目と音 as-b-d, 5 拍目と音 a(♭なし)-h(♭なし)-d, 6 拍目と音 as-b-d	右手和音は gis 音の前打音を伴った gis-d-e-gis-h と c-e-a, 左手は低い方の C1-E と A1-A-e
いずれでもなく両方 ges 音	b(♭なし)-e 重音	4 拍目と音 as-b-d, 5 拍目と音 a(♭なし)-h(♭なし)-d, 6 拍目と音 as-b-d	右手和音は c-e-gis-h と c-e-a, 左手は高い方の E-e と A-e
4 拍目	h-e 重音	4 拍目と音 as-b-d, 5 拍目と音 a(♭なし)-h(♭なし)-d, 6 拍目と音 as-b-d	右手和音は gis-d-e-h と a-c-a, 左手は高い方の E-e と A-e
4 拍目	h-e 重音	4 拍目と音 as-h-d, 5 拍目と音 a(♭なし)-h-d, 6 拍目と音 as-h-d	右手和音は gis-d-e-h と a-c-a, 左手は高い方の E-e と A-e
6 拍目	h-f 重音	4, 5, 6 拍和音いずれも as-b-d	右手和音は gis 音の前打音とそのタイを伴った gis-d-e-gis-h と c-e-a, 左手は低い方の E1-E と A1-A-e
6 拍目	h-e 重音	4, 5, 6 拍和音いずれも as-h-d	右手和音は d-e-gis-h と c-e-a, 左手は高い方の E-e と A-e
4 拍目	h-e 重音	4 拍目と音 as-b-d, 5 拍目と音 a(♭なし)-h(♭なし)-d, 6 拍目と音 as-b-d	右手和音は gis-d-e-h と a-c-a, 左手は高い方の E-e と A-e
4 拍目	h-e 重音	4 拍目と音 as-h-d, 5 拍目と音 a(♭なし)-h-d, 6 拍目と音 as-h-d	右手和音は gis-d-e-h と a-c-a, 左手は高い方の E-e と A-e
4 拍目	h-f 重音	4, 5, 6 拍和音いずれも gis-h-d	右手和音は gis 音の前打音を伴った gis-d-e-h と c-e-a, 左手は低い方の E1-E と A1-A-e
4 拍目, 6 拍目のヴァージョンをメインの楽譜に併記	h-e 重音, h-f 重音のヴァージョンをメインの楽譜に併記	4, 5, 6 拍和音いずれも as-b-d	右手和音は ( ) 付き gis 音の前打音を伴った gis-d-e-h と a-c-e-a, 左手は低い方の E1-E と A1-A, 右手和音は gis-d-e-gis-h と a-c-a, 左手は高い方の E-e と A-e のヴァージョンをメインの楽譜に併記
4 拍目, 6 拍目のヴァージョンをメインの楽譜に併記	h-e 重音, h-f 重音のヴァージョンをメインの楽譜に併記	4, 5, 6 拍和音いずれも as- [ ] 付き b-d, 4, 5, 6 拍和音いずれも as-h-d のヴァージョンをメインの楽譜に併記	右手和音は gis-d-e-h と a-c-a, 左手は高い方の E-e と A-e, 右手和音は gis 音の前打音を伴った gis-d-e-gis-h と c-e-a, 左手は低い方の E1-E と A1-A-E のヴァージョンをメインの楽譜に併記
4 拍目, 6 拍目のヴァージョンをページ下部に★印で付記	h-e 重音	4, 5, 6 拍和音いずれも as-h-d, h 音についてページ下部に★印で説明, 校訂報告参照の付記あり	右手和音は gis-d-e-h と a-c-a, 左手は高い方の E-e と A-e, 右手和音は gis 音の前打音を伴った gis-d-e-gis-h と c-e-a, 左手は低い方の E1-E と A1-A-E のヴァージョンをページ下部に★印で付記, 校訂報告参照の付記あり

に分類されており (ACO 当該ページについては下記アドレスを参照), ここで示される「1a」とは修正後の F2 であることを示している。これらのことから、本論では出版年を 1841 年とした。

<http://www.chopinonline.ac.uk/aco/catalogue/ballade-opus-38/381a-tr/>

付表3 ショパン作曲《バラード》第3番 変イ長調 作品47におけるヴァリエーション

資料名, 校訂者名等		略号	出版年	1. 第6-7小節	2. 第47-49小節	3. 第99小節	4. 第116, 118, 120, 122小節	5. 第140小節	
				左手 es 音間のタイの有無	左手:オクターヴ下の音の付加の有無	右手リズム	右手前打音の開始位置の指示	右手:3拍目と4拍目のオクターヴ as <sup>2</sup> -as <sup>3</sup> 間のタイの有無	
資料	1	自筆譜	A	あり	なし	3拍目に as 音のオクターヴ	なし	なし	
	2	筆写譜1(紛失)	C1						
	3	筆写譜2	C2	あり	なし	3拍目に as 音のオクターヴ	なし	なし	
	4	フランス初版 1	F1	1841	あり	なし	3拍目に as 音のオクターヴ	なし	なし
	5	フランス初版 2	F2	1841	あり	なし	3拍目に as 音のオクターヴ	なし	なし
	6	ドイツ初版	G	1842	なし	なし	4拍目に as 音のオクターヴ	なし	なし
	7	イギリス初版	E	1842	あり	なし	3拍目に as 音のオクターヴ	なし	なし
	8	弟子デュボワの楽譜	D	1842 ※1	あり	なし	3拍目に as 音のオクターヴ, 次の小節とのタイを付加	4箇所すべてあり	なし
	9	弟子スターリングの楽譜	S	1842 ※1	あり	なし	3拍目に as 音のオクターヴ	なし	なし
	10	姉イエンジェイエーヴィチの楽譜	J	1842 ※1	あり	あり(その後取り消しの×印もあり)	3拍目に右手 as 音のオクターヴ	なし	なし
	11	弟子シェルバトフの楽譜	Sch	1842 ※1	あり	なし	3拍目に右手 as 音のオクターヴ	なし	なし
各版	1	パデレフスキ版(イグナツィ・ヤン・パデレフスキ Ignacy Jan Paderewski 校訂)	IP	1950	あり	なし	4拍目に右手 as 音のオクターヴ, 次の小節とのタイを付加	なし	あり
	2	ナショナル・エディション(ヤン・エキエル Jan Ekier 校訂)	JE	1997	( )付きであり	なし, ありのヴァージョンをページ下部に★印で付記	3拍目に as 音のオクターヴ, メインの楽譜に4拍目のヴァージョンを併記, ページ下部に★印でタイのヴァージョンを付加	4箇所すべてあり	なし
	3	ペータース新批判校訂版(ジム・サムソン Jim Samson 校訂)	JS	2006	あり	なし	4拍目に as 音のオクターヴ	4箇所すべて( )付きであり	なし
	4	ヘンレ原典版新版(ノルベルト・ミュレマン Norbert Müllemann 校訂)	NM	2008	あり	なし, ページ下部に★印で説明付記	4拍目に as 音のオクターヴ	なし, ページ下部に★印で説明付記	なし, ページ下部に★印で説明付記

※1 資料8から11までの4人の弟子および近親者が使用した楽譜については、ペータース新批判校訂版およびヘンレ原典版新版において、いずれもF2とされている。OCVEでも同様にF2と示されているが、それぞれの資料のコメント欄における「Publication date」の項目に「early 1842」と記載されている。そのため、本論では各資料の出版年を1842年とした。

6. 第 162 小節	7. 第 176 小節	8. 第 200 小節	9. 第 216 小節	10. 第 231, 233 小節
右手 3 拍目と 4 拍目の和音間のタイの有無	左手リズム	前半:右手リズム	後半:両手リズム	右手前打音の開始位置の指示
なし	前半後半ともに 4 分音符と 8 分音符	1 拍目 4 分音符, 3 拍目 8 分音符	3 つとも 8 分音符	なし
あり	前半後半ともに 4 分音符と 8 分音符	1 拍目 4 分音符, 3 拍目 8 分音符, および 1-2 拍目 8 分音符, 3 拍目 8 分音符の 2 つのヴァージョンを併記	6 拍目が 16 分音符と 16 分音符	なし
なし	前半後半ともに 4 分音符と 8 分音符	1 拍目 4 分音符, 3 拍目 8 分音符	6 拍目が 16 分音符と 16 分音符	なし
なし	前半 8 分音符, 16 分音符, 16 分音符, 8 分音符, 後半 8 分音符 3 つ	1-2 拍目 8 分音符, 3 拍目 8 分音符	6 拍目が 16 分音符と 16 分音符	なし
なし	前半後半ともに 4 分音符と 8 分音符	1 拍目 4 分音符, 3 拍目 8 分音符	3 つとも 8 分音符	なし
なし	前半 8 分音符, 16 分音符, 16 分音符, 8 分音符, 後半 8 分音符 3 つ	1-2 拍目 8 分音符, 3 拍目 8 分音符	6 拍目が 16 分音符と 16 分音符	なし
あり	前半 8 分音符, 16 分音符, 16 分音符, 8 分音符, 後半 8 分音符 3 つ	1-2 拍目 8 分音符, 3 拍目 8 分音符	6 拍目が 16 分音符と 16 分音符	いずれもあり
なし	前半 8 分音符, 16 分音符, 16 分音符, 8 分音符, 後半 8 分音符 3 つ	1-2 拍目 8 分音符, 3 拍目 8 分音符	6 拍目が 16 分音符と 16 分音符	なし
なし	前半 8 分音符, 16 分音符, 16 分音符, 8 分音符, 後半 8 分音符 3 つ	1-2 拍目 8 分音符, 3 拍目 8 分音符	6 拍目が 16 分音符と 16 分音符	なし
なし	前半 8 分音符, 16 分音符, 16 分音符, 8 分音符, 後半 8 分音符 3 つ	1-2 拍目 8 分音符, 3 拍目 8 分音符	6 拍目が 16 分音符と 16 分音符	なし
あり	前半後半ともに 4 分音符と 8 分音符	1 拍目 4 分音符, 3 拍目 8 分音符	6 拍目が 16 分音符と 16 分音符	なし
( ) 付きであり	前半 8 分音符, 16 分音符, 16 分音符, 8 分音符, 後半 8 分音符 3 つ, ページ下部に★印で前半後半ともに 4 分音符と 8 分音符のヴァージョンを付加	1-2 拍目 8 分音符, 3 拍目 8 分音符	6 拍目が 16 分音符と 16 分音符, メインの楽譜に 3 つとも 8 分音符のヴァージョンを併記	いずれもあり
なし, ありのヴァージョンをメインの楽譜に併記	前半後半ともに 4 分音符と 8 分音符, メインの楽譜に前半 8 分音符, 16 分音符, 16 分音符, 8 分音符, 後半 8 分音符 3 つのヴァージョンを併記	1 拍目 4 分音符, 3 拍目 8 分音符, メインの楽譜に 1-2 拍目 8 分音符, 3 拍目 8 分音符の 2 つのヴァージョンを併記	3 つとも 8 分音符, メインの楽譜に 6 拍目が 16 分音符と 16 分音符のヴァージョンを併記	いずれも( ) 付きであり
なし, ページ下部に★印で説明付記	前半 8 分音符, 16 分音符, 16 分音符, 8 分音符, 後半 8 分音符 3 つ, ページ下部に★印で前半後半ともに 4 分音符と 8 分音符のヴァージョンを付加	1-2 拍目 8 分音符, 3 拍目 8 分音符, ページ下部に★印で 1 拍目 4 分音符, 3 拍目 8 分音符の 2 つのヴァージョンを付加	6 拍目が 16 分音符と 16 分音符, ページ下部に★印で 3 つとも 8 分音符のヴァージョンを付加	なし, ページ下部に★印で説明付記

付表4 ショパン作曲《バラード》第4番へ簡調 作品52におけるヴァリエーション

資料名、校訂者名等	略号	出版年	1. 第43-44小節 右手和音間: タイの有無	2. 第87-88小節 右手和音間: タイの有無	3. 第92小節 右手6拍目: d2かb1か	4. 第104小節 左手:右手とユニ ゾンか2拍目5拍 目を延ばしてい るか	5. 第108-109小節 右手和音間: タイの有無	6. 第123小節 右手上声:3拍 目と4拍目の間: タイの有無	7. 第150小節 右手 3拍目と4拍目の間: タイの有無
1 自筆譜	A1		なし						
2 自筆譜(推測)	A2								
3 自筆譜(推測)	A3								
4 自筆譜	A4		なし	なし	d2音	ユニゾン	あり	なし	
5 フランス初版1	F1	1843	あり	あり	b1音	2拍目5拍目共 に延ばしている	なし	あり	なし
6 フランス初版2	F2	1843	あり	あり	b1音	2拍目5拍目共 に延ばしている	なし	あり	なし
7 ドイツ初版	G	1843	なし	なし	d2音	ユニゾン	あり	なし	あり
8 イギリス初版	E	1844	あり	あり	d2音	2拍目5拍目共 に延ばしている	なし	あり	なし
パデルフスキ版(イグナツィ・ ヤン・パデルフスキ Ignacy Jan Paderewski 校訂)	IP	1950	あり	あり	b1音	2拍目5拍目共 に延ばしている	あり	あり	なし
ナンヨナル・エディンヨン 2 (ヤン・エキエル Jan Ekier 校訂)	JE	1997	あり、なしのヴァー ジョンをメインの楽 譜に併記	あり、ページ下 部に★印で校訂 報告参照の付記 あり	d2音	ユニゾン、延ばし ているヴァージョ ンをページ下部に ★印で付記	あり、ページ下部に ★印で校訂報告参照 の付記あり	あり	なし、ありのヴァー ジョンをメインの楽 譜に併記
ペーター・ス新批判校訂版 3 (ジム・サムソン Jim Samson 校訂)	JS	2006	( )付きであり	( )付きであり	d2音、b1音の ヴァージョンを メインの楽譜に 併記	ユニゾン、延ばして いるヴァージョンをメ インの楽譜に併記	( )付きであり	( )付きであり	あり、なしのヴァー ジョンをメインの楽 譜に併記
ベルレ原典版新版 4 (ノルベルト・ミユルマン Norbert Mülleermann 校訂)	NM	2008	なし、ページ下部に ★印で説明付記 あり	なし、ページ下部 に★印で説明、 校訂報告参照の 付記あり	d2音、b1音 のヴァージョ ンをページ下 部に★印で 付記	ユニゾン、延ばし ているヴァージョ ンをページ下部に ★印で付記	あり、ページ下部に ★印で説明付記 あり	なし、ページ下 部に★印で説 明付記	あり、ページ下部に ★印で説明付記

資料

各版